

遠藤周作

反逆



下

反逆

①下

江苏工业学院图书馆
藏书章

遠藤周作

反 逆 (下)

一九八九年七月一七日 第一刷発行

著者——遠藤周作

© Syusaku Endo 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三一九四—二二

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

定価——一二五〇円 (本体一二二四円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願いたします。

ISBN4-06-203932-X (文1)

目 次

さい、 との場合	怨恨	神学校	神になる意志	湖畔	自分もまた	「雌雄を決す」	落魄	報復	腐乱
137	122	103	90	80	65	63	38	24	7

取材の滴

293

*

北の庄

275

賤ヶ岳

252

さまざまの苦しみ

237

高山右近

222

炎上

203

天王山

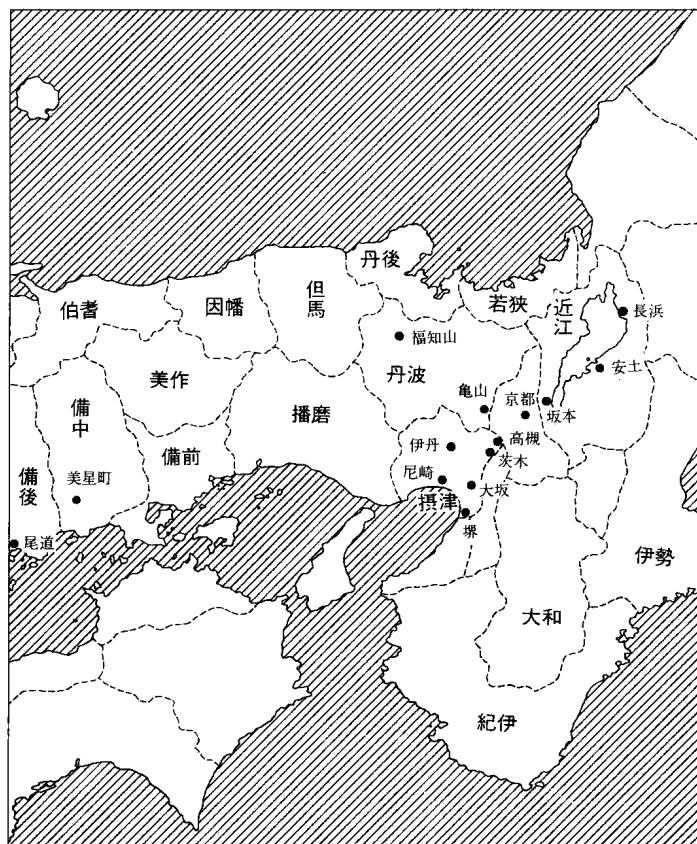
191

本能寺

170

密謀

155



反
逆
(下)

装帧 永原康史

腐乱

陰曆九月二日。荒木村重脱出の日。
毛馬の織田信長側の陣は細川藤孝、忠興父子が守備していたが、朝から指呼の間にある尼崎城の動きが活発となった。

藤孝は早速、近くの塚口に布陣している味方に連絡をとった。

夕方から尼崎城はさかんに篝火をたき、その火の粉が散る様が細川の陣営からも見える。

(油断あるべからず)

藤孝は麾下の将兵に固い守備態勢をとらせ、敵の出かたを窺った。彼の考えではおそらく敵は夜襲に出るものと思われたのである。

これが荒木側の陽動作戦だった。

すなわち敵が尼崎城からの攻撃に神経を集中している間に、村重は城を出て猪名川から舟に乗るのである。

亥の刻――

「お支度、整いました」

と知らせにきた家老の荒木久左衛門は挨拶した。

「御帰城の日まで、一同心を合わせ、この城、固くお守り致します」

「よいか。何ごとあつても」

と村重は久左衛門に念を押した。

「罪咎なき人質の女、子供たち、殺してはならぬ。万一のことあらば生かして逃げさせよ。信長の真似、決して致すな」

だしもまた北の丸から夫を送りに出ていた。

「鶴千代は眠っているのか」

村重がたずねると、だしは夫をひしと見つめ

「はい」

と答えた。

冷気のこもった闇に出ると、村重のそばに三人の男がつき添った。

乾助三郎、竹井藤蔵、志方左助である。

乾助三郎は背中に包みを背負っていた。包みのなかは村重があつた松永久秀からもらい受けた葉茶壺である。村重は毛利輝元への土産にするつもりだった。

「道中つつがなく」「つつがなく」

ひくい声で城門まで並んだ重臣たちは村重に次々と声をかけた。村重はその一人一人にうなずきながら門を出た。黙々と猪名川にむかう。

かつての有岡城の中心部と思われる現在の伊丹駅から猪名川までは非常に近い。猪名川自体が城の濠の役割をなしていたことがはつきりわかる。川岸まで咳ひとつする者もいなかった。

岸に来てはじめて藤蔵が口をひらいた。

「葦の葉かげに舟がお待ちしております」
そして彼は小さく鴨の声の真似をした。

闇のなかで權を漕ぐ軋んだ音がした。舟が接岸した。野良着の男が一人、女も一人、舟に乗っている。

「藤蔵、何者だ」

と志方左助が驚いてたずねた。

「それがし血縁の女にて阿古と申します。權を漕ぎます者も同じく縁つづきの竹井又太郎にて、藤蔵輩下の足輕にござります」

「だが、その女がなぜ舟に乗る」

「奥方さま御指図にござります。奥方さまは鶴千代さまを阿古におあずけになりました」

「鶴千代を」

と村重は前に進み出た。

たしかに女は赤ん坊らしいものを胸に抱きしめている。その顔には見おぼえがあった。いつぞや北の丸の廊下の隅で畏って手を突いていた娘だった。

(だしは……)

だしの覚悟を村重は痛いほど感じた。万が一城が落ちれば、信長はたとえ女、子供であろうと村重の血を引く限りは容赦しない。だからせてこの赤子だけは戦の圏外に落ちのびさせ、生きながらえさせたい。そのためひそかに阿古にあずけたのであらう。

「殿、いかがなされます」

と乾助三郎が当惑してたずねた。

助三郎や左助にとっては赤ん坊を連れていくのは大きな荷物だった。

「殿、いかが、なされます」

と今度は左助がたずねた。

「つれて参る」

と村重はひくい声で答えた。

六人を乗せた舟はゆっくりと岸を離れた。山国育ちの又太郎にかわり藤蔵が櫂をとった。彼は夜釣りで櫂の使いかたに馴れていた。

下流のほうで銃声がした。かねて打ちあわせ通り、敵の注意を川の外に引くため尼崎城はわざと鉄砲を仕かけたのである。

「滝川左近はこの小舟に気づきますまい」

と乾助三郎が安心したように言ったが

「油断いたすな」

と村重は耳をすませた。彼は戦なれた滝川左近が川の警戒を怠らないであろうと思った。

予感に当たっていた。

磯見重左衛門がちょうど舟の櫂音を耳にした同じあたりで、藤蔵は松明の火がこちらに近づいてくるのに気づき

「庭……早うおかぶりくださりませ」

口早やに言った。

そしてその村重たちをかくした庭の上に又太郎が釣竿や籠をおいた。

葦の葉かげにかくれ、巡察の舟が通りすぎるまで待った。櫂の音はゆっくり、こちらに近づいてくる。

突然――

火がついたように阿古^{あこ}の抱いた赤ん坊が泣きはじめた。阿古はあわててその口を押えた。

櫂の音が早くなり、松明の炎が枯れた葦の一本、一本を浮かびあがらせた。舟がそばまで近より「何者か」

中年の侍が松明をかかげて藤蔵に声をかけた。藤蔵は震え声で

「在の……百姓に……ございます」

「何をしている」

「お許しくださりませ。お許しくださりませ。鉄砲の音がいたしましたので、ここにかくれておりました」

赤ん坊がまた声をはりあげて泣いた。阿古は胸もとをひろげ、乳房をその口にあてがおうとした。その動作が中年の侍の警戒心をといたらしく

「行け」

と部下に命じた。

ふたたび櫂の音を軋^{きし}ませながら巡察の舟は去っていった。

「若君さまの、お手柄でございました」

と藤蔵は村重に言った。

「尼崎城に参れば、乳のでる女をすぐ探してまいります」

銃声がまた烈しく聞えてきた。藤蔵の漕ぐ小舟が更に三町ほど下流にくだった時、岸で松明を左右にふる影がみえた。尼崎城からの迎えである。

「藤蔵、よう、やった」

と村重は舟からあがるとはじめて藤蔵をほめた。

尼崎では城門まで嫡男、村次たちが迎えに出た。

村次は、村重が鶴千代を阿古に抱かせて連れてきたのに驚いたが、それがだしの指図だったと聞く。

「お覚悟なされたのでございますな」

と自分の若い義母の心中を推察した。

三日の朝には、伊丹を包囲した陣営から信長のもとに早馬が駆けつけた。

「荒木摂津守、有岡城を脱れ尼崎城に移り候」

知らせを受けた信長のこめかみが蒼白あおしろくなった。こめかみが蒼白あおしろになった時は彼が怒りを抑えている時だった。

この年、信長は四十六歳、宮中より右大臣の位を与えられている。

「粗忽そつもの者が……」

と彼は汗まみれになって駆けつけた使者を叱しかりつけた。もちろんみすみすと摂津守をとり逃した一益かずにたいして怒っているのである。

その日一日、信長の機嫌は斜めだった。安土城内は息をひそめて怒りが爆発せぬよう念じていた。

ところが翌日の九月四日、予告もなしに播磨から羽柴筑前守が安土に上ってきた。

「いや、いつ見ても琵琶湖はよい。舟の数のあまたなことよ」

信長の謁見えつけんをうけるため体を清めるべく、安土の宿所で汗くさい体に湯をかけさせながら秀吉は快活だった。

快活も道理。彼の調略がみごと実をむすんで備前の宇喜多直家うきたなおいえが遂に織田側に寝がえったのである。老獪うしかいな相手であったから紆余曲折よこずけはあったが、この裏切りによって毛利は孤立した。石山本願寺や有岡城は致命的な打撃をうけた筈である。

秀吉の鼻は高かった。「はげ鼠^{ねずみ}、よう、やった」とほめる信長の声が体をつきながら耳にきこえるようだった。

湯殿から出てきた時、信長の近習、菅野長頼がたずねてきた。

上機嫌な秀吉が正座すると、謁見許可のかわりに

「目通りあいならぬ」

信長から秀吉にたいしてにべもない言葉が伝えられた。

「筑前儀、主人さし置き、宇喜多との談合の儀、専断^{せんたん}甚し。思いあがりたる所業なるか。即刻、播磨に帰陣致すべし……」

秀吉は口さえあけて茫然^{ぼうぜん}とした。恐懼^{きょうく}して彼はただちに戦場に戻ることを約し、ただ、他意なかったことを言上してもらいたいと長頼に頼んだ。

村重が尼崎城に脱走したことの信長の不快感に秀吉はあわれにもとばかりを受けた。「信長公記」を読むとそのことがはっきりとわかる。

この「信長公記」によれば――

村重の脱出から十日目の九月十二日、突然、膠着^{こうちゃく}していた戦線が動いた。

攻撃軍の総司令官である信忠が尼崎の町に攻め入り、城の近くに二カ所、砦^{とりで}を作った。

もちろん、村重をみすみす脱出させた失敗を償うためである。

信長は信忠を通して、この二つの砦にかつて村重軍団の二本柱だった高山右近、中川清秀を配置させている。敵にたいする心理的な衝撃をねらったのである。

村重と村次とは尼崎城から、高山勢と中川勢の軍旗が秋の澄んだ空にはためいているのを見ざるをえなかった。

村次は父親の顔をそっと窺^{うかが}った。長年、盟友という以上に実の兄弟のように父と苦楽を共にし

た中川清秀が眼前攻撃軍の先鋒に加わっている。

村重は無表情だった。疲れきったように、諦めきったように、彼は中川、高山兩軍の砦を虚ろな眼で眺めていた。

数日後――

滝川一益の有岡城にたいする工作がまたはじまった。

上郎塚の砦を守る中西新八郎と宮脇平四郎との交渉が再開された。再開交渉に二人が応じたことは、もう心がぐらつきはじめたことだと一益は思った。

あとは動揺した心に杭を一本うちこめばよい。

「御辺たちの朋輩のなかより、はや、返り忠致す者あり」と一益は言った。

この一打は中西と宮脇とに充分、効果があつた。

「まことでござるか」

と中西新八郎が言った。

一益は中西が今の言葉を信じていないのを感じた。信じているふりをしているのがわかった。この男、落ちたな、と思った。

二日後、中西と宮脇兩名から求めに應じる旨の答えがあつた。

その夜、一益の部隊は上郎塚の砦に攻撃をかけた。

もちろんしめし合わせた攻撃だから、抵抗はほとんどない。

不意に侵入してきた敵の姿に城下町の住民たちは騒ぎだし、老若男女は泣き叫びながら逃げまわった。

町に火がかけられた。